

音

の まにまに

Music Life NINE

映画評論家、バッグデザイナーの木村奈保子さんのエッセイ「音のまにまに」。木村さんの鋭い視点に読者からの多くの反響をいただいています。今回のテーマは「音楽映画」。自らバンドを組み、ミュージシャンとしても活躍中の木村さんにとっては、音楽映画はまたひと味違ったものになるようです。



「セッション」

映画から学ぶ——踊れる音楽の最高峰、JBの音楽

音楽映画が作られるのは、本当に嬉しい。

ミュージシャン本人が登場するドキュメント映画もあれば、ミュージシャンを役者が演じる現代映画もある。

今年は、音大に通うジャズドラマーを扱った映画「セッション」が、サンダンス映画祭でグランプリ、2015年のアカデミー賞（助演男優賞）にも輝いた。そもそも映画で扱われる中心的な楽器は、圧倒的にピアノが多く、ドラムも少なければ、フルートもほぼないに等しいのは残念なところ。もちろんピアニスト映画でもいろいろで、砂浜に置かれたピアノや船内で揺れ滑るピアノなど、映画の題材として扱われる楽器は、演奏者にとって本意ではないものもあるようだ。

ちなみに私はドラム好きで、日本映画「嵐を呼ぶ男」の石原裕次郎のたたきがたりシーンにあこがれ、映画音楽のディナーショーなどで、厚かましくも“おいらはドラマー”をよく演奏した。プロのレッスンは厳しかったが、何より楽器は若い時から休まず諦めずに続けていたらよかったですと悔やむばかり。

さて、ドラム映画は、マーチングバンドの映画「ドラムライン」から実に10年ぶり。日本語タイトルを「セッション」にしたのは、音楽映画としての印象を強くしたかったのだろうか？

原題は、「Wiplash」だから、“むち打ち症”の意味。頸椎の損傷を受けるまでの過酷なレッスンと鬼教師のムチで打つような厳しい行為を意味するようだ。

主人公は入学した音大で、聞きしに勝る有名な鬼教師のバンド練習に紛れ込む。最初は、コワモテの教師に目をかけられ、ラッキーと思ったのもつかの間、軍隊のような張り詰めた空気の中でサディスティックな世界へとひきずりこまれていく。

教師は、ドラムのリズム、スピードこそバンドの要と考えるあまり、ドラマーのみに厳しい。誰を主奏者の座に上げるか、いつそこから引きすりおろすかは、日々教師の判断次第ということになる。映画は、この主人公のプレッシャーと、それによる上昇指向を刺激しながら進んでいく。生徒の人格、家族環境までいじり倒し、罵倒する教育方法は、いまだきりえない凄み。学校であっても、企業であっても、こういう教師は“パワハラ”と攻撃されるから、若者に受けるのかどうか逆に知りたい。

実際、主人公のやさしい父親も、鬼教師の厳しさを理解できない世代のようだ。いったい、主人公は鬼軍曹、ならぬ“鬼教師”に対して、いかなる感情を持っているのか？

主人公を鍛える、えぐいまでの鬼教師役を演じたベテラン俳優、J.K. シモンズが、アカデミー助演男優賞を獲得した意味は、スパルタ教育が見直されてくる傾向なのか？

マスコミ仕込みで厳しく育った私のような世代は、エンタテインメントの指導についても考えさせられる作品である。楽しく音楽をやるのも大事だが、甘すぎる環境で出す結果は、エンタテインメントを共有する観客にとっては、決して楽しめるものではない。

監督は、自身のドラム経験によるトラウマを持つところから、この作品を撮った。この作品を見たジャズのプロたちのアンチな声があるように、この作品は、“バディ・リッチ”のような“ジャズセッション”に向かう音楽性、監督のビジョンはない。

音楽は他者から教わるべきものだろうか？

音楽は、学校のよし悪しで決まるものなのか？

音楽は、練習量で決まるのか？

音楽は、環境が生み出すのか？

はたまた音楽は、民族の血か？

生まれながらの才能だけか？



「ジェームス・ブラウン～最高の魂(ソウル)を持つ男～」
 ◀ 5月30日(土)シネクイントほか全国公開
 配給:シンカ/パルコ
 (C)Universal Pictures ©D Stevens



「セッション」
 4月17日(金)TOHOシネマズ 新宿
 他 全国順次ロードショー
 ©2013 WHIPLASH, LLC All Rights Reserved.
 配給:ギャガ

しかし主人公の、これしかないという若きエネルギーが、スパルタ教師の熱さを素直に受け入れる瞬間がいい。誰もがドラムを始めてみたくなる意味でも、体育会系音楽映画として、新たなムーブメントにつながればと期待する。

音楽映画といえば最近、待ちわびた「ジェームス・ブラウン 最高の魂(ソウル)を持つ男」が、必見の作品といえる。マイケル・ジャクソンを筆頭に、あらゆるミュージシャンのリスペクトのもと、ローリング・ストーンズのミック・ジャガーが、プロデュースを買って出た伝記映画である。

天才の登場は、いつも多くの疑問を吹き飛ばしてくれる。民族の血によるリズム感、黒人文化の最大の武器だ。

ジェームス・ブラウン=JBは、原題となる曲名『GET ON UP』にあるように日本でも知られるポップな存在だが、彼の生い立ちはあまりにもむごい。アメリカ南部のサウスキャロライナ生まれ。父親は仕事がなく家には食べるものもない上、腹いせに父が母を殴る、蹴るだけの日々。母親はついに、子どもを捨て売春宿に向かう。残された父親もやがて息子を売春宿に預けて、自分はどこかへ去る。

JBは、売春宿で母親と顔を合せる瞬間があるも、決して息子として受け入れられることはなかった。

いったい、このような環境でどうやって音楽が生まれるのか? 底辺の環境から這い上がる民族の音楽とは?

売春宿を抜け出て、スーツを盗んだJBは刑務所へ。そこで慰問に来たゴスペルグループのひとりと話したことがきっかけで、彼の家で世話になるチャンスを得る。そのとき、「武器」となったのは、JBの歌の才能だ。貧困と飢えの中で、彼が興味を持って最初にふれたのは、父親の鼻歌だけ。「もう少し歌って」と幼い息子が頼んでも、父親はそれを冷たく遮って、

そして息子を捨てた。その後JBはことあるごとに、無料で聞ける教会の音楽に触れ、踊るだけを楽しみだした。

本作の伝記映画は本人のドキュメント映像ではなく、俳優チャドウィック・ボーズマンによる再現ドラマだ。ここで天才ミュージシャンの伝記を演じるのは俳優で、音楽家ではない。それは、民族の血によるパワーのみで、キャスティングでもっとも大事なポイントは、さらにJBと同じ、南部のキャロライナ生まれであることだった。

ただチャドウィックには、野性味あふれるJBに比べ、インテリで洗練された匂いがあるのは、大きな差異かもしれない。そんなチャドウィックがJBを演じるうちに、彼の魂が乗り移ったかのように、なにもかも近づいていくのに圧倒される。

映画的に素晴らしいのは、キング牧師が暗殺された後のステージ。暴動が起こることを恐れて、コンサート中止を指示されたJBは、市長に直談判。「コンサートをやめると、暴動が起こる。コンサートを敢行して、暴動を自分の力で止めること」を約束する。

かくして彼らにとっての音楽は、人種差別という歴史のなかで、政治的な状況をも救う“魂の叫び”となる。

この、差別による深い叫びなくして彼らの音楽は、完成しなかっただろう。肉体に刻まれた民族のリズムは、ダンスブルな音になる。

この映画の見せ場となっているパリのコンサートでは、おなじみの『セックスマシーン』『スーパーバッド』『ソウルパワー』が聞ける。

いったい、彼らはどこから音楽を得たのか? その肉体からあふれるリズムは、神から与えられた、たったひとつのご褒美なのか?

ブラックミュージックのコンサートの魅力は、ダンスブルなリズム。そして管楽器奏者も踊る。踊れる音楽の最高峰、JBの音楽を映画で学びたい。

Information

NAHOK(ナホック)新作のご紹介

映画「セッション」でドラムもやってみたくなった方
 におすすめの打楽器ケース!
 NAHOK ドイツ製完全防水生地 のスティックケース
 「Drum Line2」マットブラック



スネアケース「Golden Arms」
 シルバー / 黒・スカーレット
 シンバルケース「Crash」
 スカーレット / 黒・オレンジハンドル



おなじみ、NAHOK ドイツ製完全防水生地 with 止水ファスナー
 フルートケース・アマデウスシリーズC管 / H管
 特別限定Bubble Dots「Catherine」



木村奈保子

映画評論家、作家、演出家、NAHOK デザイナー。京大卒業。CBC局アナから映画評論家へ転身。ゴールデンタイムの映画解説を17年間勤め、同時に演出家としてテレビ番組やファッションビデオの制作や、著作、講演なども多数手がける。昨今は、映画音楽の演奏活動やプロデュース、ダンス舞台の演出ほか、画期的な楽器ケースを研究開発、デザイン。文化的かつ、アントレプレナー(企業家)の資質で活躍する。
www.kimuranahoko.com/

www.nahok.com

NAHOK は、ドイツ製完全防水生地に、止水ファスナーを加え、さらに欧州輸入の耐衝撃、温度 & 湿度調整機能素材を挿入したMADE IN JAPANの逸品です。